永井一孝先生の思い出

小路一光

永井先生について書くようにとのことであるが、実は先生とは在学中個人的に親しく接触する機会がなかったので、どうしても断片的なことしか思い出すことができないことを予めお許し願いたい。もっとも私自身の弱気な引込み思案のため永井先生だけでなく他の諸先生の場合も同じことである。それは在学中アルバイトに追われて自由な時間的余裕がなかったせいでもあったのだが……。私が永井先生の教えを受けたのは昭和六年度（一九三一）から同九年度の四ヵ年で、先生の六十三歳から六十六歳までの老年期であった。もっとも先生のお名前は既に早大出版部発行の「中学講義録」誌上でよく存じ上げていた。それは、私が小学校六年の時（大正十一年）（一九二二）第十七期か何期かの校外生として、講義録を通じて教えを受けていたからである。少年の日の私にとっては、永井先生や五十嵐先生のお名前は、遠くで輝やく太陽のそれに似たものであった。その先生にはからずも直接親しく教えを受けることができるようになった師範部入学当初の喜びは譬えようもない程であった。

先生に教えて頂いた学科目は、一年の時が平家物語と国文法、二年が国文学史と国文法（但し国文学史は、七月まで山口剛先生であったが、先生ご逝去のため九月から永井先生が引き継がれた）三年が枕草子、四年が古事記・祝詞・宣命・及び国語教授演習で、国文学史以外は週二回の授業であった。因みに五十嵐先生には源氏物語、上代歌謡、竹野先生には竹取物語、伊勢物語、紫式部日記、和泉式部日記、伊藤康安先生には大鏡、佐々木八郎先生には増鏡、尾上八郎先生には万葉集、古今集、新古今集、窪田空穂先生には江戸の和歌をそれぞれ教わった。

入学当初先生は満六十三歳のご老体で、さすがに重そうに足を運ばれながら階段を一段ずつ上って二階の教室に来られるお姿は、まさしく老教授そのものと見受けられた。しかし教室内に響き渡るような太く高いお声で講義なさる元気なお姿は、もはや六十三歳の老教授のそれではなかった。あたかも平家物語の授業だったので、みごとに照り輝くおつむや、いわゆる六尺豊かな堂々たる体軀は、清盛の浄海入道もさもあるべしなどと想像したりしたものであった。先生の講義は、原文の一字一句を疎かにせず忠実に口語（こうご）に訳そうとなさった。それが極端になると、「何とまあ……であろうことよ」といった口語訳となって、思わず私どもの失笑の種ともなった。正直いって先生の講義は、古典の文学的な情緒や雰囲気または文化史的背景などに触れるというようなことはあまりなかったので、大学の講義としてはいささか不満であり、もの足りなさを感じないわけでもなかった。しかしそうした講義のあり方は、謹直な先生のご性格

によるものなのか、或いは将来中等教員として必要な古典の読解に力を入れられたためであったのか、よくはわからない。ともかくも、原文を忠実に正しく読み解く力は中等教員として最も重要な基礎的な能力であって、このことは自分が実際教壇に立ってみて痛感したことであった。先生は講義の合間によく、「『これこれのことはあの先生に聞け』といわれるような自分独自のものを身につけよ」と強調された。また「在学中に中等教員、さらには高等教員の検定試験に挑戦してみよ」といわれた。このように学生の将来のことを考えて、教員としての実践的な面や就職のことなどについていろいろと注意して下さったのは、永井先生以外にはあまり見られなかった。それ故先生は学者、研究者としてよりも、学生を暖かくそして厳しく見守って指導して下さる教育者としての印象の方が私には強く感じられた。その意味で先生こそ教員養成を目的とする師範部の中心教授として最もふさわしいお方ではなかったかと思われる。

私が二年生の時の六月四日（土）の午後、級友三名と共に野方町下沼袋五五〇番地の先生の新築のお家をお訪ねしたことが当時の日記に記されてあった。西武線沼袋駅下車、土の香のする清らかな空気の中、黄色く色づいた麦、その間に可憐な実を持つ莢豌豆など、そぞろに故郷を思い出させた。先生のお家は木の香があたりに漂う洋風の建て物で、玄関に入ると奥様が出て来られて、白壁の色も鮮やかな応接間に案内された。「近頃は著述からも遠ざかり、ほとんど隠居同様に過ごしている。」とおっしゃって居られたが、学校での謹厳なご様子とは違っていかにも好々爺といった親しみが感じられた。現今の学生の気風や、卒業生の就職状況など私どもの質問に一つ一つ親切に答えて下さった。そしてこの時も例の文部省の検定試験に挑戦するよう熱心に希望された。

二度目に級友と共に先生のお宅にお伺いしたのは、四年生の時の十一月のある日のことであった。それは委員として卒業記念アルバムに揮毫をお願いするためであった。先生は私どもを座敷に通されて後、私どもの眼の前でさらさらと墨痕鮮やかにお書き下さったのが、次のはなむけの歌である。

わかれ行く子らの行手に幸あれと
いのりておくるわれぞ悲しき　秀則

この時先生のお名前の「一孝」は「ひでのり」とお読みするのだということが始めてわかった。

先生の最終講義は、昭和十年二月九日（土）（一九三五）の国文法の教授演習であった。時に先生は六十七歳の年を迎えておられたが、益々ご元気のご様子であった。その時はもう例の「検定試験」のことはおっしゃらなかった。最後に参考までに先生の略歴を「大人名事典」（現代篇）（平凡社）及び「日本近代文学大事典」（講談社）から摘記して置くこととする。

○永井一孝（ヒデノリ）（明治元年（一八六八）―昭和三三年十二月六日（一九五八）長野県西筑摩郡福島町生。池谷庄二郎二男。永井清の養子。明治二六年（一八九三）東京専門学校（早大前身）文科第一回卒業。同四〇年（一九〇七）早大教授。昭和一八年三月（一九四三）（七五歳）退職、名誉教授

○主要著書　「明治文学史」「江戸文学史」「国文学発達史」「国文学書誌」「校定枕草子新釈」「校定増鏡新釈」「源氏物語諸抄大成」（編著）